# 奈良・藤原京跡右京十一条四坊

1　所在地　奈良県橿原市石川町

2　調査期間　一　第五次調査　一九九五年（平7）四月～六月、
　　二　第八次調査　二〇〇四年二月～四月

3　発掘機関　橿原市教育委員会

4　調査担当者　一　平岩欣太、二　米田　一

5　遺跡の種類　都城跡

6　遺跡の年代　七世紀末～八世紀中頃

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

## 一　第五次調査

（吉野山）

この調査は、老人福祉施設建設に伴うものである。調査地は、藤原京跡右京十一条四坊の中央部にあたり、中央に十一条条間路と西四坊坊間路の交差点が通る。調査面積は一二五〇㎡。

主な検出遺構は、大溝（藤原宮期から奈良時代後半まで）、水溜め状遺構（奈良時代中頃から後半まで）、これに流れ込む溝二条、弥生時代中期の方形周溝墓四基などである。大溝は、十一条条間路の北側溝推定位置で検出した東西溝で、幅約七ｍ深さ一・八ｍを測る。また、大溝内の西四坊坊間路推定線上から橋脚として打ち込まれた杭を四本検出した。溝の掘削時期は藤原宮期で、掘り直しにより奈良時代中頃までは機能していた。最終的な大溝の埋没は平安時代中頃である。

木簡は大溝下層の砂礫層から一点出土した。また、同じ層からは、「□（都カ）売器」と墨書された土器一点も出土している。このほかの出土遺物として、須恵器・土師器・人面墨書土器・ミニチュア土器・瓦・土馬・銅製人形二点などがある。

## 二　第八次調査

この調査は共同住宅建設に伴うもので、一の調査地の東側隣接地である。右京十一条四坊北東坪から南東坪に相当する。調査面積は一三三〇㎡。

主な検出遺構には、藤原宮期から奈良時代後半の大溝及び掘立柱建物・塀・土坑、古墳時代以前の旧地形、縄文時代晩期包含層・土坑・ピットなどがある。大溝は前項調査の東延長部を検出した。最大幅約一七ｍを測るが、土層断面より北に拡幅した様相が見て取れ、当初は東でやや南に振れる形で幅約一一ｍ深さ約二ｍ程度の規模であったことが窺える。北肩には杭による護岸が施され、杭列の並びか

ら、のちに振れを修正して東西方向に造り替えられた状況が窺える。

木簡は大溝南肩付近の最下層である灰色砂礫層から一点出土した。同層からは他に銅製人形が一点出土している。このほかの出土遺物として、須恵器・土師器・瓦・木製品などがある。また大溝北半からは、奈良時代の土馬や人面墨書土器が出土している。

**8　木簡の釈文・内容**

一　第五次調査

(1)　・□□殿□聞□頓頓□
　　□

・□□謹謹謹薗薗□　　(163)×(21)×3　081

左辺のみ原形をとどめ、他は欠損する。表面は天地入り乱れて文字が記されるが、特に別筆とみる積極的根拠はない。裏面の「謹」の三文字目は偏と旁の間に縦線が一本入っており、別字が重なる可能性もある。最後の文字は門構えの字体。全体として某殿に上申にする文書の手習いかもしれない。

二　第八次調査

(1)　・「　□　□刀□者〔知カ〕□刀加田□〔利カ〕
　　□□□□」

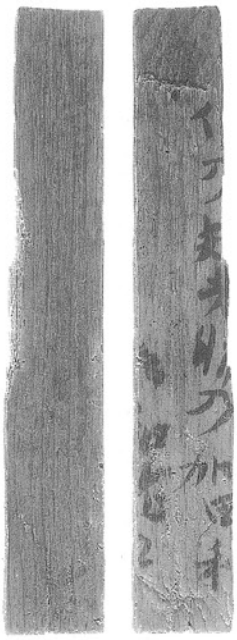
・「百□□　□□　□□」　　167×(27)×6　081

表裏は仮に定めた。表面の墨痕は鮮やかであるが、左行・右行ともに文字の中央付近で割截され、上端・下端は剝離する。右行二文字目は人偏の文字である。右行は「……と知る者、□とかたり」と読めそうであるが、詳細は不明である。裏面は天地逆方向に書かれる。墨痕は極めて薄い。最後に「百」（て）字が認められるので、表面と同様、一字一音を主体に書かれていた可能性がある。

**9　関係文献**

橿原市千塚資料館『かしはらの歴史をさぐる4』（一九九六年）

（1～7・9　一　平岩欣太、二　米田　一
8　市　大樹〈奈良文化財研究所〉）



二(1)